

オラース (コルネイユ)

紀元前七世紀、王政時代のローマは、「地上唯一の帝國」たるべしとの神意に基く使命感と、「榮光を追ひ求める氣高い情熱」とに驅立てられて、隣國アルバと今にも戰端を開かんとしてゐた。が、開戦直前、アルバの執政官が兩軍の前に進み出て、兩國の國王に向つてかう語る。元來、吾等は血筋を同じくし、今も互ひに婚姻によつて結ばれ、深い縁がある兩國なのに、かうして殺合つて共同の敵を喜ばせるのは愚かではないか。寧ろ、互ひに選拔きの三人の勇士を選び出し、彼等の鬪ひに運命を委ね、負けた國は勝つた國に従つて、兩國が一つの帝國になる様にしたらどうか。

執政官の提案は受諾され、ローマは騎士オラースとその二人の弟を、アルバは貴族キュリヤスとその二人の弟を選び出す。處が、オラースはキュリヤスの妹サビーヌと結婚したばかりだつたし、キュリヤスはオラースの妹カミーユを許嫁いひなづけにしたばかりだつた。しかも二組の若い男

女は共に深く愛し合つてゐた。あるローマの婦人が云ふ様に、「あれほどのお友だち、あれほど縁の深い方々が、お國のために死を賭しての決闘をなさろう」といふ、實に「不幸な運命」に見舞はれる事になつたのである。

自らが選ばれた事を知つて、オラーズはキュリヤスに云ふ。「今運命は、力の限りを盡くして不幸を作り上げ、我々の勇氣と對決しようとしてゐる。我々が平凡な男でないとわかつたから、運命の奴、尋常でないやり方で、我々に武運を競はせてくれるのだ」。キュリヤスが云ふ。「これほど敵意に満ちた運命を迎へるとは。私は敢然として自分の義務に勵むが、心は逆らつてゐる。それ故に私は、恐れにをのく。私自身を哀れに思ふ」。オラーズが云ふ。「我々の不幸は大きい。この上ないほど大きい。だが私は、その不幸をじつと直視する。決して恐れはせぬ」、「祖國の命令とあれば、私は喜んでただひたすらその榮譽を受け容れる。その命令が與へられたといふ光榮だけで、ほかのすべての感情は押し殺してしかるべきだ」。

三兄弟同士は激しく闘ひ、オラーズのみが生き残る。許嫁を殺されたカミーユは兄のオラーズとローマとを激しく呪ひ罵倒する。名譽を傷つけられて激怒したオラーズは妹を殺して仕舞ふが、その罪を償ふと共に死を以て自らの榮光を守るべく、死を賜りたいとローマ國王に願ひ

出る。國王は云ふ、オラーヌよ、生きるのだ、「餘りに高潔なる戰士よ」、お前の「高邁なる熱情こそ」が「大罪をなしたのだ」、生きて國家の爲に盡すがよい。

キュリヤスの悲哀に共感してオラーヌの異常な迄の名譽心に反撥する讀者もゐるようが、作者コルネイユは、この作品に限らず、己が名譽の爲に苛酷な運命と飽迄も戦はんとする「高邁なる」強者を好んで描いた。彼の英雄達にとつては、不幸が大きければ大きい程、それを克服し得た精神の榮光は大きいのだ。或る評家の云ふ様に、彼の作品の「原動力は自由」であり、しかも「初めから與へられた自由ではなく、闘ひ取つた自由」なのであつて、さういふコルネイユをナポレオンはこよなく愛して、「王侯にしてやりたかつた」と云つたのだが、「英雄的な民族」を求めて已まなかつた如何にもナポレオンらしい感想だとゲーテは語つてゐる。コルネイユは己れを驅立てる「鞏固にして高貴なる目的」を全作品に充滿せしめて、己が「作品の魂を民族の魂たらしめ」得た稀有なる劇作家だつたからだといふのである。敗戦後、吾々日本人はアメリカから「與へられた自由」にどつぷり浸つて、「民族の魂」なんぞには風馬牛だが、何時の世にも、世界にはそんな民族ばかりがある譯ではない。

(伊藤洋譯、「コルネイユ名作集」、白水社)